

フランス語のリエゾンにおける社会言語学的要因の一考察

近藤 野里

Nori KONDO

1. 始めに

本稿は、特に丁寧なスタイルが要求されない日常会話におけるリエゾン実現において、社会言語学的要因が影響するののかという疑問を出発点とする。従来、選択的リエゾン¹⁾がより実現されやすい発話である政治演説、テレビ・ラジオ放送が研究対象とされてきた一方で、義務的リエゾンのみ実現すると直感的に語られてきた日常会話が研究対象となるのは稀であった。本稿ではまず、リエゾンの実現に影響するとされる社会言語学的要因の整理を行う。その後、日常会話におけるリエゾン実現にどのような社会言語学的要因が影響し、また要因影響がある場合にどのような特徴が現れるかどうかについて、南フランスの Aix-en-Provence で録音された「AIX コーパス」を用いて考察を行う。

2. 選択的リエゾンの実現に影響する社会言語学的要因

Gadet(2007)によれば、リエゾンは発話において何らかの社会言語学的差異を示すものであるという。リエゾンは書き言葉や教養に強く結び付くものであるとしていることから、特に選択的リエゾンの実現が発話者の社会的属性や発話状況の特徴を反映する何らかの標識になることを示唆している。1970年代から行われてきたコーパスを用いたリエゾン研究²⁾では、社会言語学的要因として発話スタイル、発話状況、社会階層、学歴、性別、年齢、地理的要因などが挙げられてきた。本研究では、Gadet(2007)にならって、要因を発話者内要因と発話者間要因に2分類し、整理することとする。発話者内要因とは、発話者自身の置かれた発話を取り巻く環境（発話状況）に応じて選択する使用可能なレパートリー（発話スタイル）を示すことであるから、①発話状況とそれに応じた②スタイルの選択を本稿では取り上げる。加えて、発話者間要因とは発話者自身の社会的属性のことであり、③発話者の属する社会階層、④発話者の性別、⑤発話者の年齢を扱うことにする。

2. 1. 発話者内間要因

本稿での発話者内間要因とは、発話者がどのような発話状況に置かれるか、加えてそのような状況でどのような発話スタイルを選択するかを指す。ただし、スタイルは発話状況に応じて選択されるものである。

2. 1. 1. 発話状況

発話状況のリエゾン実現への影響とは、発話者がどのような状況で話すのか、もしくは発話をする相手（発話の受信者）が誰であるかによって、リエゾンの実現率に変化があるということを指す。一例として、Léon(1971)はドゴール大統領の10回の演説を資料体として分析した結果から、その演説環境によって選択的リエゾンの実現率に差があることを示した。つまり、選択的リエゾンの実現率は1960年にロンドンで行った演説では100%、1961年にフランスのある地方で行った演説では9%という違いが観察され、発話状況に違いがあったことを意味する。この実現率の相違を Léon は、丁寧なスタイルを使用するか否かに結び付けている。このことは、発話者が発話状況もしくは発話の受信者に応じてスタイルを変える、つまり応化が行われることを示す。通常は高尚なスタイルが要求される演説のような発話状況であっても、発話の受信者を含めた発話状況を判断し、適切なスタイルを選択する必要がある。ドゴール大統領の演説例は、選択的リエゾンの実現が公的に良しとされる傾向にある一方で、発話の理解度や親密性の欠如を引き起こす可能性がありうることを示している。そのような理由で、発話状況は使用するスタイルを決定するものとなる。

2. 1. 2. スタイル

Delattre(1966)は、リエゾンの実現はスタイル選択に依存するとし、以下の4つの発話スタイルにおけるリエゾンの実現コンテキストを提示している。

- ① 親しい間柄での会話では、選択的リエゾンはほとんど、または全く実現されない。

例：Des [z] hommes/ illustres/ ont/ attendu.

- ② 丁寧会話では、リエゾンの頻度は日常会話に比較して増える。

例：Des [z] hommes/ illustres/ ont [t] attendu.

- ③ 会議での会話では、リエゾンは頻繁に実現される。

例：Des [z] hommes [z] illustres/ ont [t] attendu.

- ④ 詩の朗読では、全ての、またはほとんどのリエゾンが実現される。

例：Des [z] hommes [z] illustres [z] ont [t] attendu.

Delattre が挙げた例では、①親しい間の会話では、限定詞と名詞の間における義務的リエゾンのみが実現されている一方で、④詩の朗読のような書き言葉に重点が置かれるような状況では、全てのリエゾンコンテキストで実現があるということが示されている。Booij et De Jong(1987)もまた、発話スタイルをリエゾンの社会言語学的要因のひとつに挙げ、発話スタイルを丁寧なものにすることでリエゾン実現の割合が増加すると述べている。つまり、丁寧さが必要とされない普通の会話と比較して、丁寧会話ではリエゾン実現率が増加することは、リエゾンが丁寧さの標識にもなりうることを示すだろう。加えて、Howard(2006)はスタイルが丁寧なものになるにつれて、/p/、/t/、/k/のようなリエゾン子音が

発音可能であるコンテキストでのリエゾン実現が大いにありえるとしている。確かに、このようなリエゾン子音を聞くことができるのは、ラジオやテレビのニュース番組で文字を見ながら発話する環境に限定される傾向にあるといえる。

2. 2. 発話者間要因

発話者間の要因とは、発話者自身の社会的属性の違いから生じる要因である。選択的リエゾンの実現が教養階級に特徴的であることは、Fouché(1959)が理想的な話者として「教養階級に属するパリジャン」を挙げたことから明らかである。以下では、発話者間要因として、社会階層、性別、年齢を挙げることにする。

2. 2. 1. 社会階層

Booij et De Jong(1987)と Ashby(1981)は、高い社会階層に属する話者は、低い社会階層の話者に比べてリエゾンをより多く実現すると主張した。また、1975年に Laks(1980)³⁾がパリ郊外の工場地域で若者を対象に行った調査から、その地域の若者が義務的リエゾンを実現する一方で、選択的リエゾンは実現しないという傾向があることがわかった。Encrevé(1988)は、Laksの調査対象地域出身の共産党書記長 G. Marchais が最も選択的リエゾンを実現しない理由をその結果に結びつける。加えて、フランスの高等教育機関出身の政治家の一人は、選択的リエゾンの実現率が他の政治家と比較しても高いことも例に挙げる。ただし、Encrevé(1988)は、労働階級出身の共産党員の一人が、フランス国立政治学院出身の政治家と比較して、より高い確率で選択的リエゾンを実現したという例から、出自や職業を選択的リエゾンの実現率へ単純に関連付けることはできないとも述べている。このような反例は、リエゾンの実現能力は、綴り字の知識もしくは教育レベルを暗示するものである一方で、それを身につけさえすれば職業的技術となりえることを示しているとも解釈できるだろう。

2. 2. 2. 性別

多くの社会言語学的研究で、性別要因は社会言語学的変数の一つとされているが、リエゾンの実現に関しても性別を要因として考察した研究がいくつかある。例えば、Malécot(1975)は、女性は男性よりも選択的リエゾンの実現率が高いと結論付け、Booij et De Jong(1987)もまた短文リスト発音実験において同様の傾向を観察している。反対に、Ashby(1981)は男性が女性よりリエゾンを多く実現すると彼のコーパス研究からの結果を用いて主張している。ただし、最近の研究では Ranson(2008)の南仏話し言葉コーパスでは、女性のほうが男性よりも幾分高い実現率を示すが、義務的リエゾンを除いた場合には、性別に違いは観察されなかった。研究によってばらつきがあることから、リエゾン実現が実際に「女らしさ」「男らしさ」といった特徴になりえるかどうかについて結論的なことは言うことが

できないだろう。

2. 2. 3. 年齢

リエゾン実現に関する年齢の影響として、年齢が高い層は低い層と比較して高いリエゾン実現率を示しているとして主張されることが多い。Booij et De Jong(1987)は、最も年齢が高い層が、最も高いリエゾン実現率を示し、年を取るにつれリエゾンを実現するようになると解釈している。また、Ranson(2008)の南仏コーパスの分析でも、低年齢層のリエゾン実現は、高年齢層に比較して少ないと述べていることから、リエゾンの実現は年齢を示す標識となりえるとも考えられる。一方 Malécot(1975)は、若い年齢層のリエゾンの実現率が幾分か高くなると述べている。発話の受け手が発話者よりも年上であり、丁寧さが求められると判断した場合には、意図的にリエゾン実現を増やす可能性も考えられることから、年齢に関しての調査の際には、発話者同士の年齢を考慮に入れる必要があるだろう。

3. 本研究の目的

本研究の目的は、特にかしこまったスタイルが要求されない日常会話においてはどのような社会言語学的要因がリエゾンの実現に影響するのかを考察することである。本稿では特に年齢、性別、発話状況での役割に限定して、リエゾンの実現率を観察し、これらの要因の影響について考察したい。

コーパスを用いた先行研究として、Encrevé(1988)による政治家の演説コーパス、Ågren(1973)によるラジオコーパス、Malécot(1975)のパリの中流階級のインタビューコーパス、Ranson(2008)のコーパスが挙げられるが、これらのコーパスは丁寧さが要求される発話状況での発話を対象としているため、発話スタイルが日常会話的であるとは言い難い。本研究で用いる AIX コーパスは同年齢のインフォーマント同士の会話を録音したものであり、発話内容も日々の生活や天気、または大学の勉強といったテーマで会話が繰り広げられる。加えて、スラングを含む例も多々あることから発話状況が特に丁寧なスタイルを促すものでなく、以上に挙げた先行研究のコーパスと比較して、使用された発話スタイルは親しい間柄で用いられるものだと判断するに至った。

4. 分析の対象と方法

4. 1. 分析対象

本研究ではフランス語話し言葉コーパス「AIX コーパス」⁴⁾を使用する。AIX コーパスの特徴として、発話状況が自然会話と即興劇会話の2種類があることを挙げる。特に、即興劇会話の内容としては、「銀行での口座開設」、「不動産屋で家探し」、「市役所で結婚式の予約」、「旅行代理店で旅行の相談」、「洋服を買う」など、職業従事者と客の役割に分かれてインフォーマントがロールプレイングを行うというのが特徴的である。AIX コーパス全体の長さは 21 時間分に及ぶが、本稿では自然会話と即興

劇会話の 19 会話分を含む約 4 時間分を対象とした。

1) 自然会話：9 会話（2 時間 54 分）、インフォーマント内訳：男性 7 人、女性 9 人

年齢層：20 代（女性 2 人、男性 2 人）

30 代（男性 3 人、女性 1 人）

40 代（男性 1 人、女性 2 人）

60 代（男性 1 人、女性 1 人）

70 代（女性 3 人）

2) 即興劇会話：10 会話（1 時間 24 分）、インフォーマント内訳：男性 4 人、女性 2 人

年齢層：20 代（男性 3 人、女性 1 人）、30 代（男性 1 人、女性 1 人）

以上が、分析に用いた 19 会話分のインフォーマントの内訳であるが、インフォーマントの男女数に偏りがあり、また年齢に関しても 50 代の話者を含まないことから、分析で得た結果から傾向を知る以上の結論は得られないということをここで断わっておく必要がある。

4. 2. 分析方法

本研究で用いる AIX コーパスには文字化されたスクリプトが既に存在するので、本研究ではそのスクリプトにリエゾンコードを付ける作業を行った後、Excel を用いてリエゾンコード、リエゾンのコンテキスト、コンテキストの品詞名などの情報を付けたメタファイルを作成し、使用した。また、選択的リエゾンコンテキストについては Malécot(1975)の行った分類を参考とすることにした。Malécot の挙げる選択的リエゾンコンテキストの例の一部を以下に挙げる。

A) 名詞句： 複数形名詞+... 例) enfants américains

B) 動詞句： 動詞+過去分詞 例) (ils) ont été chassés

C) 前置詞句： 単音節前置詞+ ... 例) dès à présent, chez un ami, sous un arbre

複数音節前置詞+ ... 例) depuis un jour

D) 副詞句： 単音節副詞 (/z/のリエゾン子音を含むもの) +... : pas encore, mieux habillé

副詞 bien+... : bien habillé

統計的分析には、
$$\frac{\text{選択的リエゾンの実現回数}}{\text{発話内の選択的リエゾンコンテキスト総数}}$$
、つまり各発話者の選択的リ

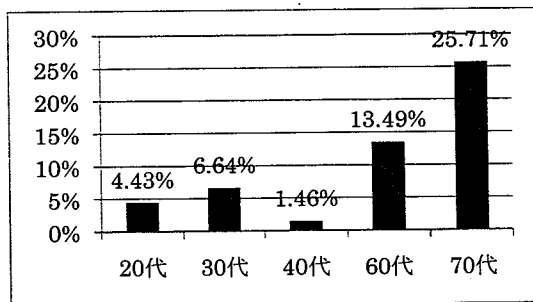
エゾン実現平均パーセンテージ（以下、PFL 値）を算出したものを数値として使用した。

次節では、まず自然会話におけるリエゾン実現への年齢、性別の要因影響を考察し、その後、自然会話と即興劇会話を対象に発話状況における役割の違いがどのような影響をリエゾン実現に及ぼすかについて考察を行う。ただし、本稿では即興劇会話における男女差の問題に関しては特に考察しないこととする。

5. 分析

5. 1. 年齢

自然会話の PFL 値の平均は、40 代(1,46%) が最も平均実現率が低く、20 代(4,43%)、30 代(6,64%)、60 代(13,49%)、70 代(25,71%)の順で PFL 値に上昇が見られた。以下では、20 代～40 代と 60 代～70 代のグループで年齢差を比較する。

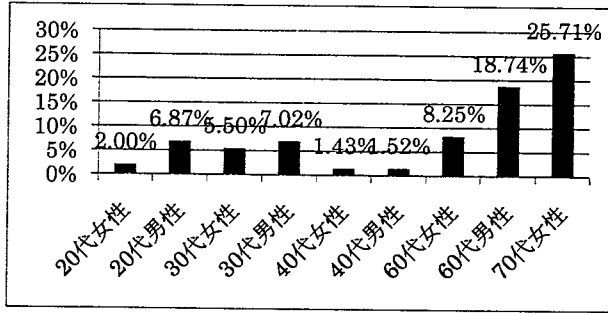


グラフ 1. 年代別選択的リエゾン実現率

PFL 値に対して、グループ①(20-40 代)とグループ②(60-70 代)に対して、帰無仮説：「2 グループ間に差がない」として t 検定を用いて統計処理を行った結果、有意差が得られた (t 値=-1,485、p 値=0,00259<0.05)。以上の結果は、AIX コーパスにおいては選択的リエゾンに年齢要因の影響があることを示している。ただし、分析で用いたコーパスの問題点として、年代別のインフォーマント数が少なすぎるという理由が挙げられるため、インフォーマント数を増やして再度考察する必要があると言える。

5. 2. 性別

自然会話での性別における PFL 値平均はそれぞれ男性が 7,86%、女性が 10,86%であり数値的には男女差があるのではないかと考えられるだろう。ただし、帰無仮説：「男女間に差がない」として t 検定を用いて統計処理を行った結果、有意差は得られなかった (t 値=0,515、p 値=0.189>0.05)。



グラフ 2. 年代および性別における選択的リエゾン実現平均率

グラフ 2 は年代および性別における選択的リエゾン実現平均率を示しているが、若い年齢層で、はっきりとした男女差があるとは言い難い。ただし、60代男女間では PFL 値が 2 倍以上違うということがわかるが、60代のインフォーマントは男女一人ずつであることから、一般化はできないだろう。性別に関しては、先行研究の結果でも揺れがあったが、性別がリエゾン実現に影響するかどうかは本研究でも断定するには至らない。

5. 3. 発話状況

発話状況として、ここでは自然会話、即興劇会話のうちの職業従事者役、それに同じく即興劇会話のうちの客役を 3 つのタイプとして、それぞれ PFL 値の平均値を算出した。①自然会話(9,55%)、即興劇会話ではそれぞれ②職業従事者役(20,34%)、③客役(8,38%)と平均値間に違いが確認された。特に、①自然会話と③客役の平均には大きな差異はないが (①9,55%VS③8,38%)、職業従事者役の PFL 値は①自然会話と③客役の 2 倍以上の値を示しているのが特徴的である。

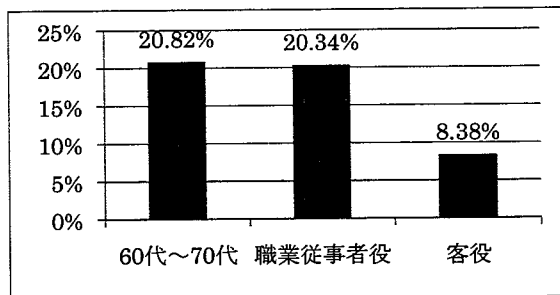
これら 3 タイプの発話で PFL 値間に違いがあるかどうかを確かめるために、一次元配置の分散分析を行った。検定の結果、5%水準で有意差が見られた ($F=3,285 > F$ 境界値 3,275, $p=0.03454 < 0.05$)。この結果は、リエゾンの実現平均回数が発話状況によって異なることを意味する。本研究はその後、テューキー(Tukey)の方法⁵⁾を用いて多重比較を行った。

表 1. 3 発話種間での q 値および有意差の有無 (HSD 値=0,113)

発話状況	q 値=	有意差の有無
自然会話 vs 職業従事者役	0,108 < HSD	なし
自然会話 vs 客役	0,01164 < HSD	なし
職業従事者役 vs 客役	0,1195 > HSD	あり

多重比較の結果は、②職業従事者役は①自然会話と比較して PFL 値間の有意差がない一方で、③客役と比較して有意差があることを示している。それと同様に、自然会話と客役の会話は有意差がないことが明らかになった。この結果は、職業従事者役も客役も自然会話と比較して、選択的リエゾン実現に違いがないことを示すことになる。

ただし、自然会話では 60 代～70 代における選択的リエゾンの実現率が高い値を示していたことから、①自然会話（60 代～70 代）、②職業従事者役、③客役の間でのリエゾン実現率の平均値を比較してみることにする。



グラフ 3. 3 発話種間での選択的リエゾン平均実現率

グラフ 3 から、①自然会話（60 代～70 代）と②職業従事者役の PFL 値間ではほとんど同じような値を示している一方で、①自然会話ないし②職業従事者役を③客役と比較した場合には、数値に 2 倍以上の隔たりがあることがわかる。即興劇会話のインフォーマントは 20 代および 30 代であるが、職業従事者役の発話をする際には 60 代～70 代の発話者と同程度に選択的リエゾンを実現する、つまり 20 代、30 代の発話者が丁寧さを必要とする状況では、自分たちよりも年齢が高い発話者（ここでは 60 代～70 代の発話者）に接近すると捉えることができる。そのことを確認するために、①自然会話（60 代～70 代）、②職業従事者役、③客役の発話における PFL 値を元に再び分散分析を行うこととする。

その結果、3 発話種間に 5%水準で有意差が見られた ($F=3.77 > F$ 境界値 3.28, $p=0.033 < 0.05$)。この結果は、PFL 値の平均が発話状況で異なることのみを意味する。そこで、どの発話種間に有意差があるかに関して、更にチューキーの方法を用いて調べた結果が表 2 である。

表 2. 3 発話種間での q 値および有意差の有無 (HSD 値=0,113)

発話状況	q 値=	有意差の有無
自然会話 (60 代～70 代) vs 職業従事者役	0,0048<HSD	なし
自然会話 (60 代～70 代) vs 客役	0,124>HSD	あり
職業従事者役 vs 客役	0,119>HSD	あり

以上の結果は、職業従事者役は、自然会話（60代～70代）との間に有意差がない一方で、自然会話（60代～70代）と客役の間には有意差があることを示す。つまり、職業従事者役の発話者はその発話状況で60代～70代の発話者と同様の選択的リエゾン実現率を示したこととなる。また職業従事者役の選択的リエゾン実現率は客役と比較しても高い。この結果は、職業従事者役が客対応の際に求められる「丁寧さ」を意識する可能性がある場合に、選択的リエゾンの実現率が上昇し、その傾向は60代～70代の発話者の実現値に近似するというを示すだろう。

6. 考察

統計的分析からは自然会話において性別要因の影響は特に観察されなかった一方で、年齢要因の影響は観察されたことから、選択的リエゾンは年齢を反映するものであるとも考えられる。また、特に60代～70代の話者は、より若い年齢層と比較して、選択的リエゾンを実現しているのが特徴的であった。発話状況では職業従事者役のPFL値は客役と比較すると高い傾向にあり、この傾向は「丁寧さ」が要求される場合には選択的リエゾンが実現される傾向があると解釈できるものである。職業従事者役と自然会話における60代～70代の話者の選択的リエゾン実現率には有意差がないことから、20代～30代の発話者が日常会話において丁寧さを要求される場合には、彼らよりも年齢が高い層の実現率により接近すると考えられるのではないだろうか。また、選択的リエゾンの実現は比較的若い話者にとっては「丁寧さ」を示すものである一方で、60代～70代の話者にとってはより日常的なものであるとも考えられる。

AIXコーパスにおけるリエゾン実現は、発話スタイルが丁寧なものであるとされるニュースコーパスなどと比較した場合に、いわゆる選択的リエゾンコンテキストでの実現は稀である。そのような日常会話において、特にかしこまった発話スタイルが要求されないが、客の対応に必要な場合の丁寧さが求められる発話では、選択的リエゾンがある程度実現されることが本研究で明らかになったと言える。ただし、即興劇会話はインフォーマントが現実的にはその職業に従事しているわけではなく、「演じて」いる理由から、実際の職業従事者の発話とは異なるということに留意すべきだろう。なお、AIXコーパスは南フランスで録音されたフランス語話し言葉コーパスであることは、地域的な特徴を反映している可能性を暗示するため、本稿の考察がフランス語話者全体で共有される傾向であるかどうかについては更に調査が必要である。

注

¹⁾リエゾンは従来3つに分類されており、必ず実現する義務的リエゾン、実現してはいけない禁止的リエゾン、母語話者間で実現が揺れる選択的リエゾンの3種類がある。

²⁾Ågren(1973)、Malécot(1975)、Ashby(1981)、Encrevé(1988)を参照のこと。

³⁾Laks(1980). *Différenciation linguistique et différenciation sociale : quelques problèmes de sociolinguistique*

française, thèse de 3^{ème} cycle, Paris VIII.を参照。

4) AIX コーパスは 東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム『言語運用を基盤とする言語情報学拠点』によって 2005 年に南フランス Aix-en-Provence で収集された。フランス語の多言語話しことばコーパスとして、一部がこの言語情報学拠点のホームページ上の http://www.coelang.tufs.ac.jp/multilingual_corpus/ft/ で公開されている。本研究の分析に使用した発話は、同年齢のインフォーマント同士がペアを組んで話しているものである。

5) 分散分析によって 3 つのグループ間に何らかの有意差があるかどうかを知ることができるが、どのグループ間に有意差があるかということまではわからない。テューキーの方法を使用する理由は、どのグループ間に有意差があるかについては多重比較を行う必要があるからである。

参考文献

- Ågren, J. (1973). *Etudes sur quelques liaisons facultatives dans le français de conversation radiophonique*. Uppsala: Acta Universitatis Upsaliensis.
- Armstrong, N. (2001). *Social and stylistic variation in spoken French: a comparative approach*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Asby, W. (1981). French liaison as a sociolinguistic phenomenon, In *Linguistic symposium on the Romance languages (9th)*, Cressey, W. W. and Napoli, D. J. (eds), 46-57. Washington, DC: Georgetown University Press.
- Booij, G., De Jong, D. (1987). The domain of liaison: Theories and data, *Linguistics* 25. 1005-25.
- Delattre, P. (1966). *Studies in French and comparative phonetics*. The Hague: Mouton.
- Encrevé, P. (1988). *La liaison avec et sans enchaînement*. Paris : Éditions du Seuil.
- Fouché, P. (1959). *Traité de prononciation française*, 2ème édition. Paris: C. Klincksieck.
- Gadet, F. (2007). *La variation sociale en français*. Collection l'Essentiel français. Paris: Ophrys.
- Howard, M. (2006). Morpho-phonetic variation in the spoken French media: A comparison of three sociolinguistic variables, *Estudios de Sociolingüística* 7. 1-29.
- Léon, P. (1971). *Essai de Phonostylistique*, Studia phonetica, Montréal : Paris : Bruxelles : Didier.
- Malécot, A. (1975). French liaison as a function of grammatical, phonetic and paralinguistic variables, *Phonetica* 32. 161-179.
- Ranson, D. (2008). La liaison variable dans un corpus du français méridional : L'importance relative de la fonction grammaticale, *Congrès Mondial de Linguistique Française-CMLF'08*, Durand J. Habert B., Laks B.(éds). Paris: Institut de Linguistique Française. 1669-83.